

平成30年度仙台藩白老元陣屋資料館友の会視察研修

『幕末の探検家・松浦武四郎の足跡を学ぶ旅』実施報告書

仙台藩白老元陣屋資料館友の会

◆本事業は、「白老町みんなの基金」の補助を受けて実施しました◆

【行程表】

- 1、日 程 平成 30 年 6 月 7 日（木）～9 日（土）
2、参加者 5 名（川西政幸・武田信昭・高橋淳一・梶原洋子・宮森知津子）
3、行 程

平成 30 年 6 月 7 日（木）

7 時 00 分 白老コミセン発
8 時 00 分 新千歳空港着
8 時 40 分 新千歳空港発 ～10 時 25 分 中部国際空港着
11 時 00 分 中部国際空港 ～11 時 45 分 津新港
12 時 00 分 津市内 昼食 ～13 時 00 分
13 時 00 分 津新港発
14 時 00 分 伊勢市内着
17 時 00 分 研修一日目終了
17 時 30 分 チェックイン（伊勢市内）

平成 30 年 6 月 8 日（金）

8 時 30 分 ホテル発
9 時 30 分 松浦武四郎記念館 ～ 松浦武四郎生誕の地等見学
12 時 00 分 昼食 ～13 時 00 分
13 時 00 分 松阪城址及び歴史民俗資料館
及び本居宣長資料館 ～17 時 00 分
17 時 30 分 チェックイン（松阪市内）

平成 30 年 6 月 9 日（土）

8 時 30 分 ホテル発
9 時 00 分 三重県総合博物館見学 ～11 時 00 分
12 時 00 分 津新港 ～12 時 45 分 中部国際空港着
13 時 30 分 昼食
15 時 15 分 中部国際空港発 ～16 時 55 分 新千歳空港着
16 時 55 分 新千歳空港発 ～18 時 00 分 白老コミセン着
18 時 00 分 順次解散

【幕末の探検家松浦武四郎の足跡を学ぶ旅】

訪問日：平成30年6月8日

報告者：武田 信昭

天候は快晴、初夏の伊勢の太陽の元、昨日の伊勢神宮（外宮・内宮）参拝の疲れも見せず、午前8時30分にホテルを出発した。松阪市にある松浦武四郎記念館には9時30分に到着した。

〈幕末維新を生きた旅の巨人松浦武四郎〉

松浦武四郎記念館では北海道の名付け親である松浦武四郎の、数々の功績を紹介している。また、武四郎の生没日にあたる毎年2月には武四郎まつりが開催されている。

〈少年時代と諸国遍歴〉

文化15（1818）年2月6日、伊勢国一志郡須川村（現在の三重県松阪市小野江町）で、父時春、母登宇のもとに4人目の子が生まれた。その年の干支が『寅』にあたることから、虎とゆかりの深い「竹」と、4番目の子であることにちなんで「竹四郎（後に武四郎の字を用いる）」と名付けられた。



◆松浦武四郎記念館のロビーでは、武四郎の調査の成果の一つである蝦夷地の地図が公開されている

須川村は代々、紀州和歌山藩の領地で、松浦家は村をまとめる役割を担った地士（郷土）を務める家柄だった。武四郎は7歳頃（年齢は数え年）から近くの真覚寺で、来応和尚から文字の読み書きを学んだ。幼い武四郎にとって、全国を巡って修行し、不思議な霊力を身に付けていた和尚は憧れの存在だった。9歳で病を患ったときには、出家して僧になることを望んだという。しかし父からは許されず、お経を暗記して唱える日々を過ごした。読み書きを覚えてからは、全国の名所を図入りで紹介した「名所図会」を愛読していた。武四郎が13歳の時、「文政のおかげ参り」が起こり、全国各地から伊勢神宮を目指して多くの旅人が訪れた。「文政のおかげ参り」は江戸時代に数回繰り返された大規模な伊勢神宮への群参現象のことを言う。「一生に一度はお伊勢参り」の言葉にある

ように、当時は伊勢参りが一種の社会現象であったが、これが大規模に行われたのが「文政のおかげ参り」だった。街道を行き交う旅人の姿に、武四郎も大きな刺激を受けたことだろう。一方、この年から津藩の儒学者平松楽斎のもとで学問に励むことになった武四郎は、古いものへも関心を抱くようにもなっていた。

16 歳を迎える少し前、武四郎は平松楽斎のもとから実家に帰ってくると、家を出て一人で江戸へ向かいしました。この時は一か月余りの家出だったが、武四郎は篆刻（はんこ）を覚え、また旅の魅力を感じ、17 歳からは本格的に全国各地を巡る旅に出た。19 歳の時には四国を一周し、弘法大師ゆかりの八十八カ所の霊場を巡った。20 歳の時には九州を旅した。

21 歳の時、長崎に逗留していた武四郎は大病を患う。病気が治ると遂に出家を果たし、「文佳」という僧名を授かり、平戸の千光寺などで住職を務めた。25 歳の時には対馬と渡り、さらに朝鮮半島を目指そうとしたが、このときは鎖国のため果たすことが出来なかった。

再び長崎に戻った武四郎は、蝦夷地（今の北海道）がロシアによって脅かされていることを知った。大きな衝撃を受けるとともに、蝦夷地を調べる必要性を感じるようになった。

9 年振りに故郷に帰ってきた武四郎は 26 歳になっていた。これまでの旅の記録をまとめると、27 歳で蝦夷地へ向けて旅立ったのである。

〈個人としての蝦夷地調査〉

初めて蝦夷地へと渡った武四郎は 28 歳になっていた。以後 29 歳、32 歳と 3 度に及ぶ蝦夷地調査を個人で行っている。その背景には、当時の日本が置かれていた状況が大きく関与していた。武四郎の思いは、ロシアの南下政策によって緊張が高まっていた蝦夷地の様子を詳しく調べ、多くの人々に伝えることにあった。

3 回の蝦夷地調査の記録をまとめたことで、武四郎の名は江戸でも評判となった。また、これらの記録は水戸藩を通じて幕府へ献上され、幕府の中でも武四郎への評価が高まっていった。

*28 歳で行った 1 回目の蝦夷地調査の成果をまとめた調査記録…全 12 冊

*29 歳で行った 2 回目の蝦夷地調査の成果をまとめた調査記録…全 15 冊

*32 歳で行った 3 回目の蝦夷地調査の成果をまとめた調査記録…全 8 冊

〈幕末の志士との交流〉

蝦夷地調査を行うようになってから、武四郎は幕末の志士と数多く交流した。異国船が相次いで来航する中で対外的な緊張状態にあった日本の将来を心配し、何とかして国を守ろうと活動していた吉田松陰や頼三樹三郎、水戸藩の儒学者藤田東湖など、実にたくさんの志士たちと交流を結び、情報をやりとりしている様子が、残された資料から知ることができる。

〈幕府の雇いによる蝦夷地調査〉

安政元年（1854）、『日米和親条約』締結されると、下田・箱館（函館）の二港が開かれることになり、長年にわたる鎖国は解かれた。ロシアとも「日露和親条約」を締結した幕府は、蝦夷地および北蝦夷地（樺太）の山や川などの地理を明らかにし、新しく道を通すための調査を武四郎に命じた。これにより武四郎は、さらに 3 回と調査を重ねるが、通算 6 回にわたって行われた蝦夷地調査の記録は、延べ 151 冊にのぼった。武四郎はただ調査するだけでなく、開国を求めてやってくる外国に対してどのように日本を守るべきかを考えた。どこからどこまでが日本で、その境界に近い地域がどんなところにあるのかを、まず明らかにしなければならないという思いがあった。

＊39 歳で行った 4 回目の蝦夷地調査の成果をまとめた調査記録…全 32 冊

＊40 歳で行った 5 回目の蝦夷地調査の成果をまとめた調査記録…全 24 冊

＊41 歳で行った 6 回目の蝦夷地調査の成果をまとめた調査記録…全 61 冊

武四郎は、6 度の蝦夷地調査の成果を詳細な地図にも表したほか、アイヌ民族の文化を紹介することにも務めた。一般の人々に解りやすく蝦夷地の様子を伝えようと、エピソードを交えて読みやすくまとめなおした。当時活躍していた画家や、歌人に挿絵や和歌を寄



◆山本命学芸員より解説を聞く

せてもらうことで、多くの人々に手に取ってもらえるよう工夫を施し、紀行本として続々と出版した。

このように武四郎の蝦夷地調査は、たった一人の力で成し遂げることが出来たわけではない。調査中も北海道各地で暮らすアイヌ民族の協力があつた。武四郎は調査を通じてアイヌ文化に触れ、アイヌの人々を尊重することを訴えている。

〈明治政府への登用〉

やがて時代は明治維新を迎える。武四郎は大久保利通の推挙によって政府へと登用された。箱館府判事などを経て、政府が開拓使を置いてからは、長官・次官に次ぐ判官に任じられた。

明治 2 年（1869）、呼ばれてきた「蝦夷地」に代わる新しい名称を考えることとなった武四郎は、「日高見道」・「北加伊道」・「海北道」・「海島道」・「東北道」・「千島道」の 6 案を出した。その結果、北にあるアイヌ民族が古くから暮らす大地という、先住民族としてのアイヌの人々を尊重する思いを込めた「北加伊道」が政府で採用され、字は『北海道』に改

められた。このほかにも、武四郎は郡名・国名（のちに支庁名）の選定にも携わったことから、北海道の名付け親と呼ばれている。

その功績により従五位に叙せられますが、北海道の開拓政策を巡って反発したため、開拓判官に就任してわずか半年で政府を辞職している。開拓使となった武四郎が目指したのは、アイヌ民族が安心して暮らせる北海道であった。そのためには松前に再び支配させないこと、悪徳商人を排除することなどを訴えた。しかし、これに抵抗した商人らは既得権益を守るために東久世開拓使長官へ取り入り、結果として武四郎の意見は聞き入れられなかった。武四郎は信念を貫きとおすために政府を辞している。

〈趣味に生きた晩年〉



◆館内では武四郎の調査の行程を絵図とともに紹介

政府を辞職した後、武四郎が北海道の問題に関わることは出来なくなった。当時武四郎が使った雅号は「馬角齋（ばかくさい）」であった。晩年の武四郎は、趣味の古物採集に集中し、同好の人々と展覧会を開いた。また、学問の神様として知られる菅原道真を信仰し、賛同者を募って各地の天満宮に銅鏡や石標を奉納したほか、各地を旅して過ごした。68歳を迎えた武四郎は、自らの終焉の地を大台ヶ原と定めた。70歳にかけ

て三重県と奈良県の境に位置する大台ヶ原に登り、地元の人々の協力を得て登山道を開き、小屋の建設や石標の建立などを行っている。

また、70歳を前にして、東京の自宅に畳一畳分の書斎を建てた。諸国を旅するなかで知り合った全国各地の友人に頼み、その土地の社寺から古材を送ってもらった物を組み合わせた。この書斎は東京都三鷹市にある国際基督教大学のキャンパス内に、現在も残されている。



◆アイヌ民族博物館との姉妹館提携書

70歳で大台ヶ原に登った武四郎は富士登山も果たすが、明治21（1888）年に、71歳でこの世を去った。松浦武四郎の生涯は全国各地を巡る旅、6度に及ぶ北海道調査、晩年は大台ヶ原や富士山に登るなど、まさに旅そのものであったと言っても過言ではない。旅を通して全国各地の文化に触れ、多くの人々と交流し、その土地のことを記録した。その姿からは、単に旅行者・探検家だけではなく、

200冊を超える著者を著した作家であり、そのうちの100冊以上を自ら出版した出版者

であり、さまざまな学問の分野に関心を示し記録した学者であり、アイヌ民族の民具や神社の古材で書斎を建てた収集家でありと、数えればキリがないほど様々な顔を持っていた。

こうした松浦武四郎の姿を、大切に伝えられてきた資料が物語っている。現在、白老を含む（平成 26 年 10 月に建立）北海道の 60 ヶ所に松浦武四郎の足跡を伝える記念碑が建てられ、松阪市と北海道との交流も盛んに行われている。

山本命学芸員の詳しい解説と膨大な資料に浸りながら記念館を後にし、中野恭館長に案内されながら武四郎の誕生地へ向かった。

【松阪市で武四郎生誕の地へ】

訪問日：平成30年6月8日

報告者：宮森 知津子

「松阪」はマツサカと読み、明治3（1871）年「松坂」から「松阪」に変わった。この模範となったのは大阪だった。同じ年に「大坂」が「大阪」になったので、「松坂」も「松阪」に決定したと伝えられている。昭和8（1933）年2月に市となった。



◆道中、伊勢街道の賑わいなどの説明を受ける

を見れば当時どんな商売をしていたか、どこから来たか、本家か分家かまで分かるようにしているそうだ。今でも、地元の人は名前では呼ばず屋号で呼びあうらしい。

武四郎の生家もまた、参宮街道沿いに建っている。武四郎が16歳まで住んでいた。平成30（2018）年に修復が終わり、2月25日から一般公開されている。当時は少し離れた場所にあったが、後に街道沿いに移り住んだと伝えられる。家督は武四郎の兄左七が継ぎ、代々に渡り残されてきたが、松阪市が約1,550万円で購入した。屋根には立派な鬼瓦が葺かれ、大変興味深い。武四郎が生きていた時代の様子に戻す方針で整備されている。建物は「妻入り」と言われる建築様式で、間口の幅に比べ奥行きがあるのが特徴だ。昭和期に増築された二階の部分は撤去し、元々あった井戸や、竈が復元された。設計を含め約2億円、10年をかけた修復となった。



◆武四郎の生家の正面。手前の道路が旧伊勢街道

松浦武四郎記念館長である中野恭氏の案内で武四郎の生家へ行く。記念館から生家までは歩いて7分。景色は変わってしまったが、伊勢街道（参宮街道、伊勢本街道とも）として多くの人々が利用した道幅は、当時のままとのこと。お伊勢参りに歩いた旅人を思いながら生家へ向かった。街道沿いの各家々には、かつての賑わいが分かるように屋号の看板が掲げられていた。屋号

松浦家は庄屋を営んでいたが、和歌山藩から地域を守ることを命じられた地侍^{ぢごらい}でもあった。戦いが起きた場合は出雲川を越えて和歌山藩に侵入する敵を食い止める役割を担ったため、武士の特権である名字を名乗ることや刀を持つことが認められていた。

建物へ入ると、正面には畳敷きの部屋が広がっている。当時は室内に大きな屏風が置かれており、旅先から武四郎が送った領収

書や交友のあった人物からの手紙が貼られていた。明治 2（1870）年、武四郎が甥へ手紙類を送り、屏風を作らせたという。六曲一双の屏風は蝦夷屏風と名付けられ、国の重要文化財として現在でも武四郎記念館に保存されている。部屋の天井には槍、弓を収納していたハンガー状のものが吊るされている。また園庭には「従五位守開拓判官阿倍朝臣弘建之」と刻まれた判官灯籠がある。従五位の位を賜り、官僚となった記念に武四郎が建てたものだ。灯籠に阿倍と書いてあるのは、家名が阿倍だからです。武四郎は 15 歳で元服し、名は弘となる。しかし、武四郎と弘の両方の名前を使っている。



◆記念柱前で中野館長（左から 3 人目）と撮影

この家が無かったら武四郎の人生、武四郎の旅はなかったと思う。12 歳頃から街道を埋め尽くす旅人に刺激を受け、旅に出たいと思うようになったそう。武四郎の生誕の地は、まさに武四郎の旅の原点だった。

中野館長からは最後に、締め切られていた生家が公開され、「従五位」と刻まれた判官灯籠を見ながら北海道の人や地域の人と語りあえることが嬉しいと話してくれた。

古くから多くの人が行き交う土地柄が、武四郎という偉人を育んだ。また、全国津々浦々で、武四郎は、世話になった人がお伊勢参りのときに不自由しないよう、実家宛の紹介状を預けたという。武四郎の機転もさることながら、そうして訪れた人へ実際にお世話をし返す懐の深さが、松阪という土地に根付いていたのだ。



【幕末の国学者の生い立ちに触れて】

訪問日：平成30年6月8日

報告者：梶原 洋子

資料館「友の会」解説員となって、11年の年月が過ぎた。年は取ってもまだまだ新人。先輩の皆さまと道外へ研修に出掛けるのは初めてで、今回三重県松阪市へ一緒にできる事が嬉しい。

北海道命名150年。今、道内では松浦武四郎が話題となっている。打合せの結果、「本居宣長記念館」訪問のレポートを担当することとなった。本居宣長は、松浦武四郎と同じ三重県松阪市の出身である。

本居宣長（1730～1801。72歳没）は江戸時代の国学者、文献学者、医師。その名声は誰でもご存知であろう。宣長は伊勢国松阪の商家に生まれたが、父を早くに亡くした。医師の道を志し、医師をしながら収入を得る傍ら、「源氏物語」や「万葉集」の研究に勤しんだ。34歳のとき賀茂真淵（1697～1769。72歳没。江戸時代中期の国学者、歌人、古典研究を通じて古代日本人の精神を研究）との出会いを切っ掛けに、「古事記」の解読研究に没頭するようになった。昼間は医師、夜は「古事記」の研究を続け、35年の歳月をかけて「古事記伝」44巻を執筆した。



◆国指定史跡松阪城址の敷地内に設けられた記念館

松阪市は戦国時代の武将蒲生氏郷が伊勢国飯高郡にあった宵の社（四五百森）に城を築いて町を開き、天正16（1588）年に「松坂」と命名したことに始まる。やがて氏郷は会津に所替となり、江戸時代の初期、元和5（1619）年には紀州藩領となった。松阪は伊勢湾岸の豊かな生産力と伊勢神宮の参宮街道と和歌山街道が交わる交通の要衝として経済が発達し、17世紀半ば頃には伊

勢商人の町として発展したことで多くの豪商が誕生した（三井、小津、長谷川、長井、殿村等）。その豪商伊勢商人の一人として正保2（1645）年に江戸進出を果たしたのが小津三郎右衛門、その子孫が本居宣長である。また小津家の子孫には昭和を代表する名監督・脚本家の小津安二郎がいる。

本居宣長記念館は本居家より松阪市へ1万6千点の資料が寄贈され、昭和45（1970）年11月5日に開館した。

宣長は幼い頃から学問が好きな子供だった。父母は商人として育てて欲しいと手習いをさせたが、本を読む事が大好きで商売する気のなかった宣長は学問に精を出した。父が亡

くなった翌年の 13 歳から日記を付け始め、17 歳で「大日本天下四海画図」を作成した。この絵図は縦 1m20 c m、横 2m の日本地図だが、架空の「韓唐」や「羅列国」を含む 3,019 の地名、254 の城主名、小野小町の出生地、熊野古道など盛り沢山の情報が記されている。この絵図はある程度当時の資料を集め参考としたようであるが、大部分は実際に行ってきた人の話を基に作成したそうだ。僅か 17 歳の少年が 1 ヶ月で描いたのだ。宣長と同年代に生きた仙台藩士、学者で「三国通覧図説」を表した、林子平（1738～1798。60 歳没）に、どこことなく似ているような気がした。

宣長のこの絵図は、記念館の 2 階へ上がる踊場の壁に見る事が出来る。息を呑むほどの素晴らしい大作（伊能図ができる 60 年前の事）で、この絵図を作成した事が宣長の日本という国を考える学問の原点となった。宣長の学問好きに、「そんなに学問が好きなら医者を目指しては」と母が一言。23 歳の時に京都へ医者修行に行き、28 歳で松阪へ帰り開業した。



◆書斎の鈴屋も移設されている

記念館の隣には、宣長が 72 歳で亡くなるまで住んでいたという家が移築されている。彼の祖父が隠居所として元禄 4（1691）年に建てたもので、江戸時代の風情が漂う建物である。宣長には奥様と 5 人の子供がいて、この家で医者の仕事をしなが、古典の講義や歌会を開いた。宣長 53 歳の時に 2 階の物置を改造し、4.5 畳の書斎を作り、床の間の柱に「掛け鈴」を下げ、研究中眠く

なるとその鈴を鳴らした。以後その場所は、「鈴屋」と呼ばれた。

では、宣長が最も長い年月をかけた「古事記伝」について少し触れてみよう。古事記は奈良時代の 712 年に成立した。稗田阿礼の記憶した天武天皇の詔を太安万侶が編纂し、元明天皇の御世にあたる和銅 5（712）年に天皇へ献上された。上、中、下全 3 巻に分かれ、原本は存在していないという。後生の写本が現在に伝わっている。上巻は神の代の物語。中巻は神と天皇の代の物語。下巻は天皇の代の物語となっている。

この古代の履歴書を宣長は 35 年の歳月をかけて「鈴屋」で解き明かした。宣長は古事記冒頭の「天地」の読み方に取り掛かるが、「この読み方はアメツチ、いやアメクニではないか」と、僅か 2 文字の解釈に 5 年半をかけた。執拗なまでの探索がはじまった。

学芸員さんの話によれば「記念館へ来る子どもたちには伝えたい事がある」と言う。○宣長の昼間の医師の仕事は、現代のように病院があるわけでもなく、薬箱を持ち歩いて病人の所へ往診に行く。往復 40 km も歩く事があった。現代のように車があるわけでもな

い。

○電気も無いので昼間でも部屋の中は暗く、夜は行灯で勉強した。子どもたちを旧宅へ連れて行くと、まず座敷に座らせてその暗さを体験してもらおう。江戸時代と言っても子どもたちには、ピンとこない。こうして昔の生活と今の生活のギャップを感じてもらおう。

○子どもたちに一番伝えたい事は、「疑問をもってほしい」という事。そして、その疑問を解き明かして行ってほしいという。宣長がそうしたように。そのためにも、ご両親様達には子どもの「何故」をどんな時でも聞いてあげてほしい。

見学した子供たちからは「夜、そんなに勉強して眠くならなかったの?」「ちゃんと眠ったの?」とか質問が飛び交うようである。

宣長自身は、疲れたら「柱掛鈴」を鳴らして眠気を覚まし、気分転換を図ったそうだ。宣長の勉強の基本は「無理をしない」という事で、学問は継続だとする信念があった。35年間ただ黙々と続ける事ではなく、休養期間もとっている。

希代の学問の天才、本居宣長。人間とは何か、生きる事とは何か、学問とは何か、日本人はどう生きるべきか。200年の時を越え、現代の私たちに「考えなさい」と問いかけているようである。



◆掛け軸、書簡、絵図などを豊富に展示

松阪市ホテルの部屋の机を何気なく開けてみたら「古事記」の本が入っていた。

さすが松阪市と感動した。その古事記の現代語訳者は「竹田恒泰」氏で、テレビのトーク番組等でおなじみの旧皇族竹田家に生まれた明治天皇の玄孫である。

竹田氏は「古事記を読む事は天皇の由来を知ることであり、日本とは何か、日本人とは何かを知ることであります。そして古事記を

読む事で日本人の自然観、死生観、歴史観が分かってきます。日本人の伝統的な精神である大和心を知ろうとしたら、「古事記」を読むのが確実な方法ではないでしょうか」と述べている。

また、宣長の『古事記伝』で宣長自身はこう述べている。

『数十年間の間、心力を尽くして、此記の伝四十四巻をあらはにして、いにしへ学びのしるべとせり』とある。この『古事記伝』は現在進行形の本である。思考の経緯は明らかにしたが、研究のバトンは未来の人達に渡されているのだ。

この研修の初日には、伊勢神宮の外宮から内宮へとお参りをした。こちらも大変意味深く、感動的な日となった。「日本とは何か、日本人とは何か」を考える宣長の心境に、日本人だからこそ心を添えてみたいと思う一人である。

最後に心を同じくする「友の会」の先輩の皆さまと研修出来たことは、現場で未知の世

界を解き明かし体感する事ができた。今後、解説の心の糧としたい。

〈参考資料〉

『新版 本居宣長の不思議』：公益財団法人鈴屋遺蹟保存会、本居宣長記念館

『古事記 現代語訳』 訳者 竹田恒泰：一般財団法人竹田研究財団 古事記普及委員会



【松阪市立歴史民俗資料館】

訪問日：平成30年6月8日

報告者：高橋 淳一

1 はじめに

研修2日目、伊勢商人の本拠地として繁栄した旧城下町は、梅雨入り後の蒸し暑さが残るものの、思いのほか凌ぎやすい天候であった。

研修主題の松浦武四郎記念館、国史跡松阪城址、本居宣長記念館と見学が続くなか、「この地域は多くの史跡、景観、さらに郷土の名だたる偉人たちの歴史的文化遺産を活用して地域の活性化を推進しているんだ」。そんな感慨を抱きながら城址北側に建つ松阪市立歴史民俗資料館に向かった。

見学した時の感想を、次のような観点から整理して記述してみたい。

- ◎松阪商人が江戸に進出して、伊勢商人の先駆として活躍した理由
- ◎伊勢白粉や松阪木綿が、何故その名を天下に知らしめたのか
- ◎資料館の歴史観や文化財の効率的な発信、利用状況を理解する
- ◎資料館の教育学習活動への位置づけから考えられること

2 松阪市立歴史民俗資料館の入口にたたずんで



本資料館は明治45（1911）年に建てられ図書館として開館し、昭和53（1978）年に市制45周年を迎えたことを記念して、歴史民俗資料館に衣替えをしている。

木造2階建てで左右に翼部、中央に玄関が突出した左右対称の構成となっている。

入口には薬種商桜井家の店を再現したコーナーがある。3代目が旅人の困った様子を見て、足の膏薬「萬能千里膏」と腹痛薬「黒丸子」を造って売出し、成功した。この2つの薬名の大きな看板は、書の大家・池大雅が書いたもの。黒漆に金箔が施された金看板で、当時の松阪商人の勢いを感じさせるものがある。

庭には市内の役所、お寺、民家などを取り壊した時に寄贈された鬼瓦が展示され、国史跡松阪城の石垣の美しさと、伝統的な明治和風建築の重厚さがうまく調和し、趣のある風情を演出していた。

3 日本の商いを変革した「松阪商人の商い」とは

館内には近世松阪の商都への発展をもたらした「伊勢白粉」と松阪商人の名を天下に知らしめた「松阪木綿」の関係資料が常設されている。

(1) 伊勢白粉

奈良の大仏の鍍金^{めっき}に使われた「伊勢の水銀」は、鎌倉時代になると「伊勢白粉」と呼ばれた。薬剤を生産する軽粉業が射和（現松阪市射和町）に起こり、室町時代に最盛期を迎える。「伊勢白粉」は伊勢神宮の御師^{おんし}（宿場などで参拝客の案内や宿泊の世話をする人たち。「おし」とも読む）たちによって全国的に流通するようになる。

これらによって射和は栄え、軽粉で富を集めた地元の商人は、江戸に進出し伊勢商人の先駆として活躍した。

(2) 松阪木綿

室町時代に綿が渡来すると、この地域はその栽培に適していたことから、木綿織物の一大産地になる。それに拍車をかけたのが江戸店持ちの松阪商人で、大伝馬町（現東京都中央区日本橋）に軒を並べた木綿問屋へは、毎年 55～56 万反もの松阪木綿が送られた。松阪木綿は単に品質が優れているだけではなく、上質な藍の縦縞がいわゆる粋好みの江戸庶民に大いにうけ、「松阪縞^{まつさかじま}」の名でもてはやされたのである。

(3) 特別企画 紙問屋「小津清左衛門家」展を見て

小津清左衛門家は、三井家、長谷川家、長井家等と共に江戸に店を構え、財を成した松阪屈指の豪商である。

3代目長弘が承応2（1653）年に江戸大伝馬町に紙店小津屋を構えた。その後、隣地に木綿店伊勢屋を築き、江戸本町にも紙店を開いて江戸一番の紙問屋となった。その長きにわたる松阪商人小津屋の歴史と、残された資料を見る機会に恵まれ、大変幸運であった。



資料館では松阪の文化を全体的に紹介する場として歴史、文化、芸術、暮らし、産業などの分野において、特別展を年4～5回開催しているという。常設展では他にも、物を作り、暮らしを立て、郷土を繁栄させてきた数々の祖先の道具類を収蔵していた。

4 万両箱もある「松阪商人」の館

歴史民俗資料館を見学した後、その昔、お伊勢参りの旅人が行き交った「参宮街道」沿

いにある「松阪商人」の館を見学した。この館は前記小津清左衛門の邸宅を資料館として公開したものである。

内部は「見世の間」「勘定の間」など 20 余りの部屋で構成されている。展示品の中には「千両箱」ならぬ「万両箱」もあり、その広い屋敷は、まさに「江戸店持ち伊勢商人」の風格を感じさせるものがある。

「東京物語」で有名な映画監督・脚本家小津安二郎も、小津清左衛門に関わりを持つ小津一族で、松阪の豪商の家の出である。

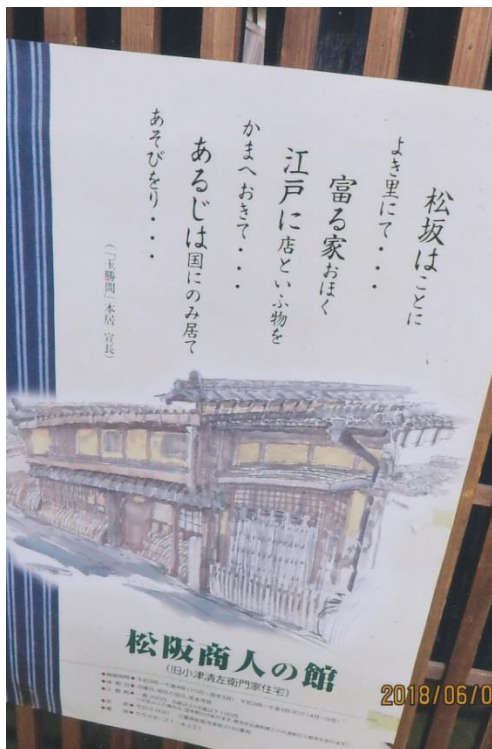
5 本資料館の地域や学校を意識した教育学習活動の実践から

(1) 見終わって満足感を得る「見せる工夫」

資料館は比較的小規模ながら、地域の原点としての雰囲気漂っていた。

展示方法にも、ひとつひとつが親しみを持ち楽しめるよう、「見せる工夫」が施されている。説明文は簡易にまとめられて解り易く、読み終わってから、色々な感慨が自然と湧いてきた。このことを松阪木綿の説明文の中から二つほど例示してみたい。

例 1

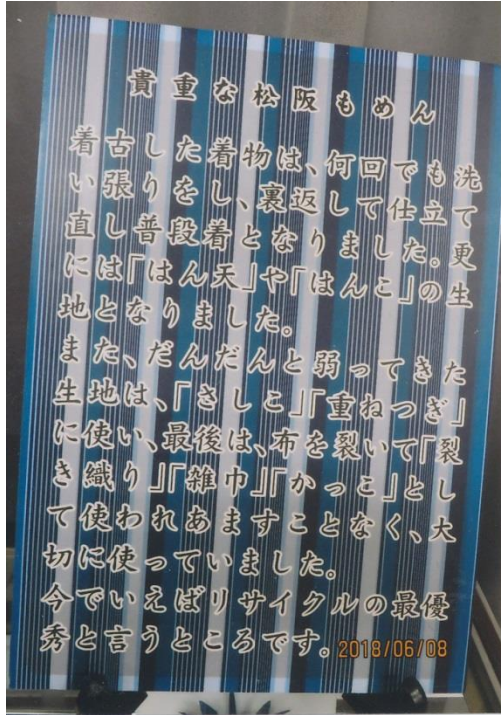


松坂はことに
よき里にて・・・
富る家おほく
江戸に店といふ物を
かまへおきて・・・
あるじは国にのみ居て
あそびをり・・・
「玉勝間」本居宣長

例 1

「玉勝間」は「もののあわれ」論をはじめ、意見を平明な雅文で述べる本居宣長の随筆である。宣長の学問と人生観を知る上でも、この本に目を通したくなる。「玉勝間」の言葉の意味も調べてよく理解できた。

例2



貴重な松阪もめん

着古した着物は何回でも洗い張りをし、裏返して仕立て直し普段着となりました。更には「はん天」や「はんこ」の生地となりました。

また、だんだんと弱ってきた生地は、「さしこ」「重ねつぎ」に使い、最後は、布を裂いて「裂き織り」「雑巾」「かっこ」として使われあますことなく、大切に使っていました。今でいえばリサイクルの最優秀と言うところです。

明治生まれの私の母も同じことを生活の中に取り入れていた。私は磯から布海苔を採取し、木綿を板に張る糊を鍋で作り、母の手伝いをしたことを思い出す。

(2) こどもたちの生活の中から文化、芸術に触れる機会の充実

資料館に張られていた「第四回 松阪の偉人たち展（文化財センター）」のポスターに関心をもった。蒲生氏郷、本居宣長、松浦武四郎、小津清左衛門などが写真入りで紹介されていた。来月の開催のため、見ることなく記述することを躊躇うがお許しを請う。題名から判断して、偉人の功績や史料の展示かと想う。

それもあるかもしれないが、目玉は次の三点であるという。

◎日本最古のオルガンで本居宣長の六代孫の本居長世作曲の「十五夜お月さん」、「赤い靴」、「汽車ポッポ」を皆で歌う

◎偉人の思い出を五・七・五の俳句・川柳で発表する。

◎時代を越えて松阪の偉人さん大集合 仮装？劇？

子どもたちが体験学習を通じて文化、芸術に触れる機会をもち、人と物が触れ合うなか

で、コミュニケーション能力を高めることを狙っていると考えられる。

白老町においても、民族の歴史や文化、先人の生き方に学び、ふるさとへの誇りと愛着を育む教育がなされている。

そのことは、社会科副読本「わたしたちの白老」・「白老町ふるさと学習モデル」また毎月回覧されている各小中学校の学校便り、さらに町広報誌「げんき」などへ目を通す時に感じられ、大変うれしく思っている。

6 まとめ

松阪商人は江戸に進出し、松阪木綿が大流行したことで豪商として成功した。

江戸での社会的地位と存在価値を高め、小売等の歴史の礎を築いたのである。

最近では郊外の大規模ショッピングセンターの発達で、どこも中心街は縮小してきた今、松阪には、伝統や文化を大切にしながら脈々と受け継がれている。「商いのところ」があって、大型量販店にない独自のサービスや人との、繋がりが感じられるという。

早朝ではあったが、松阪駅構内、そして当時の商人の繁栄が垣間みえる中心商店街をぶらり歩いてみた。商いの心に触れたような気分になった。

今回の友の会研修の主題は「松浦武四郎の足跡に学ぶ」である。松浦武四郎記念館の中野恭館長、山本命学芸員の熱のこもった素晴らしい解説にも感銘を受け、今後の私たち友の会の解説にも生かさなければならない。

試みに万歩計を持参したが、研修中は歩数が 14000 歩を数えた日もあったようだ。武四郎はその十倍以上はあっただろう。

武四郎は物を頭で考えるより足の裏で考えたという人がある。私たちも、もっともって足の裏で物を考え行動に移さなければならないと思った。

最後になりましたが、この度の友の会研修旅行にあたり、ご支援・ご指導いただいた安藤教育長はじめ、関係の皆様に深く感謝申し上げます。

【松阪市研修を終えて】

友の会会長：川西政幸

仙台藩白老元陣屋資料館友の会は昭和 59 年 10 月、退職校長を中心に、仙台藩白老元陣屋資料館の開館にあわせて組織された。以来、団体解説や資料館事業のサポートを通じ、白老が誇る文化財である国指定史跡白老仙台藩陣屋跡、知られざる仙台藩士の足跡の発信に努めてきた。

友の会では研鑽と交流の拡大を目的に、定期的な研修会も継続している。道内はもとより、藩士の故郷である宮城県へも幾度か訪れる機会を得られた。北海道命名 150 年を記念する本年、“北海道の名付け親”“幕末の探検家”として知られる松浦武四郎の故郷、三重県松阪市へ研修に赴けたことは、実に望外の喜びであった。2 泊 3 日の研修を通し、参加者一同、意欲を新たに、意気軒高に解説活動が続けている。

本研修は“白老町みんなの基金”による補助金を受けて実施している。ご採択いただいたことについて、深く感謝の意を表したい。

さて、三重県松阪市は商人のまちとして古くから栄え、また伊勢街道が縦貫する地域として多くの人々が行き交う、物流・交通の拠点であった。本研修では国学者本居宣長の生い立ちに触れる機会も得られた。いずれも名だたる幕末の偉人であるが、彼らの個人的な足跡はもちろん、彼らを育んだ地域の特色を目の当たりにできたことも、本研修の大きな成果であった。白老町が掲げる多文化共生社会の実現に目を向け、人と人の繋がりや情報の交流が、いかに重要であるかを再確認できた。

これらの基盤となる「おもてなしの精神」を改めて強く意識し、今後の友の会の活動における根幹に据えたい。

なお、本研修では、元松阪市議の前川幸敏氏にも懇切なもてなしを受けた。

前川氏は松阪市議として 9 期にわたり連続当選され、市制改革に努められた。「光れ街道夢おこしの会」設立にも尽力され、現在は会の代表として、参宮街道に行燈を設置するための事業に邁進されている。このたびは、ご多忙の折にも関わらず、多岐におよびお世話くださった。

前川氏は松浦武四郎を郷土の誇りとして誰よりも愛し、研究されている。先年にはプロシンガーとして、「北斗の星人」をリリースされた。白老牛肉まつりでご披露されるなど、白老町の PR にも大いに貢献いただいている。

このたびは私ども友の会のために時間を割かれ、肉料理やカラオケ道場を案内してくださった。英気を養わせていただき、一同生涯の良い思い出となった。心より感謝申し上げます。